

三隅町の明日の農業

麦作の振興を考える



厳しい 農業情勢の中で

今年の米価も、やっと据置きとなっております。しかし、依然として農業情勢は厳しい状況が続いております。

水田再編のポスト第三期対策の公表も遅れており十二月〜一月になるのではないかと言われています。おそらく第三期対策に比べ、厳しい条件が付せられることは間違いないでしょう。感じとしては転作面積の拡大は、もちろん作物によっては奨励金の対象から外れることが予想されます。

また加算金に付いても、作物の団地化の内容によって大きな較差がつけられるものと思えます。転作の面積が拡大され奨励金等が減額等になりまずと、先進的な農家や組織に支えられていた転作の問題も改めて考え直す必要があります。また米価もアメリカあたりの生産費に比べ日本では四倍程度となり農作物の輸入緩和が叫ばれているおりに上昇する可能性は殆どありません。このような情勢をふまえて、とくに農業機械等の過剰投資などを中心に幾分でも生産

費をさげていく考え方を持たねばなりません。

このような事をじっくり考えてみますと転作の大幅積を集团的に消化出来るものは「小麦+大豆」の転作と水稲裏作利用の小麦が導入し易い作物といえます。

忘れられた麦秋の思い

昭和三十五年頃までは当町にも麦作面積が三四〇ヘクタールありました。今でも播州平野、山口市の名田島、近くでは菊川町の麦秋は、美しいものです。

当町でも当時の麦秋の光景を思い出される方もあると思えます。しかしその後経済情勢は一変し、余り収益のあがない麦作は次第に減退し最近では殆ど目に付くことがないようになっていきました。今では大半の農家はくだらんものを作るより水稲を早く植えて仕事に出る方が、よっぽど良いと考えている方が多いようです。

しかし、古くから、働場の多い名田島では何故麦作を作り続けているのか疑問になります。調べてみますとやはり収益があるからです。この人達は水稲裏作の期間借地等

を行い一人で十ヘクタール近くの面積をこなしています。つまり昔の麦作から脱皮して生産性の高い機械化一貫体系を確立して安定した生産を行っているからだと思えます。



果して三隅での麦作は期待できないものなのか

当町での麦作の良い条件となるものは水田基盤整備が殆ど完了していることです。排水対策等いろいろと問題はありますがこれからの麦作は大規模農機具が駆使できる農道、水田区画等が整備されていることが第一の条件となります。逆に悪い条件と言えば、やはり播種期、刈取り期に雨の多いことです。

現在第七農区、二条窪等で小麦作を行っています。山陰特有の気象条件には苦勞しております。しかし各集団とも気落ちすることなく問題点を

改善しつつ今年の小麦栽培に取りくんでいく体制です。過日も県のプロジェクトチームの派遣を受け麦作の安定生産に対する指導を受け、地域に適合した栽培体系を確立するよう努力しております。

麦作振興協議会の設置とライスセンターの増改築の実施

新しくライスセンターが増改築され本年の水稲から利用されます。また新しい施設、機械の導入で、今まで麦作の大きな課題であった乾燥調整が可能となっております。麦作振興協議会も設置され各農区には麦作推進員がおかれ、農協を中軸として小麦の振興を図っていく考えです。

近く協議会を開催し、余り手のかからない機械化一貫作業体系で生産できる栽培体系をつくり、農区、集落等の麦作振興の話し合いの場などでお知らせすることにしていきます。

